

主 題：アブラハムの救い

聖書箇所：ローマ人への手紙 4章1－8節

パウロはこれまで救いは神の恵みによるということを教えて来ましたが、しかし、ある人たち、つまり、行ないによる救いを信じ守り続けていた者たちにとっては、そのように聞いてもなかなか受け入れることのできないものでした。今まで自分の信じて来たこと、それを捨て去ることは非常に勇気の要ることです。難しいことです。それは今の私たちも同じです。これまで信じて来たことを覆すことは非常に難しいです。クリスチャンでもそうです。でも、大切なことは、私たちはどんなときでもみことばに立つということです。神のみことばの教えを柔軟に謙虚に受け入れて行くことが必要です。

◎ みことばに立つ

昔、ある兄弟とこんなことを話したことがあります。私の質問は「もし、教会の教理と聖書が矛盾した場合どちらを取るか？」というものでした。皆さんならどちらを取りますか？その兄弟は「私は教会の教理を取る」と言いました。でも、私たちは聖書を取らなければいけません。決して教理をないがしろにしているわけではありません。教理は間違った教えが入って来ることから、一人ひとりを、また、教会を守る大切なものです。しかし、私たちの信仰というものはこの神のおことばに立つものです。これが神のメッセージであり、これが神が私たち人間にくださった神からの指針です。ですから、このみことばに立つ、それが私たちの信仰です。そのことに関して、どのような時でもしっかりとみことばに立つようにと聖書は私たちに繰り返し教えるのです。

◎ みことばを聞く態度

ヤコブがこのようなことを言いました。ヤコブ1：21「**ですから、すべての汚れやあふれる悪を捨て去り、心に植えつけられたみことばを、すなおに受け入れなさい。みことばは、あなたがたのたましいを救うことができます。」**と。「**みことばは、あなたがたのたましいを救うことができます。」**と記されています。ここでヤコブが教えたことは、私たちは自らの信仰の成長を妨げる悪、罪を捨てて、そして、むしろ、私たちの信仰の成長に役立つものを受け入れることが必要だということです。なぜなら、私たちの周りには成長を妨げるものが山ほどあるからです。では、いったいそれは何でしょう？ヤコブが言うように、それは神のおことば、この聖書のみことばです。それを素直に受け入れなさいと彼は言いました。つまり、このような態度をもって私たちはみことばに接することが必要だと言うのです。私たちはある種の偏見をもってみことばに接してはならないのです。私たちがみことばに接する時に必要なことは、素直で従順な態度です。学ぼうとする態度です。神さま、どうぞ教えてくださいという態度です。自分の考えが一番とする間違った罪のプライドを捨てて、主の前に謙虚になることが必要です。そのことをヤコブはここで教えたわけです。神のみことばが私たちに伝えてくれる、教えてくれる真理を素直に受け入れようとする謙虚さです。なぜ、それが必要なのでしょうか？このみことばによって私たちの信仰が成長するからです。子どもたちと接していて驚くのは彼らの素直さです。彼らは言われたことをそのまま信じ、受け入れようとします。そのような謙虚な態度が私たち信仰者には必要なのです。

◎ みことばを聞く責任と語る責任

私たちはみことばを聞くときに、それが本当に聖書が教えていることなのかどうかを正しく見極める必要があります。一人ひとり聞く責任があります。同時に、語る者にはそれ以上の責任があります。みことばを語る者は、それが本当にみことばの教えに沿ったものであるのかどうか、みことばが教えようとしていることを正しく語っているのかどうかを見極めるのです。みことばは私たちにとって大切なことから、私たちのみことばを聞く責任と語る責任が大切だとみことばが教えているのです。

パウロが手紙を送った人々も、実はそういう態度が必要でした。彼らもパウロの教えに対して、それが本当に神が教えておられることかどうかということの評価しなければいけなかったのです。そして、神が教えてくださっていることであるなら、たとえ、それが自分たちが今まで信じてきたことと違うことであっても、それを喜んで受け入れる、そういう態度が必要でした。

◎ アブラハムのたとえ

さて、ローマ人への手紙をもう一度見ると、パウロは明らかに、この4：1からアブラハムという、ユダヤ人たちが非常に尊敬する人物をたとえに挙げて今まで教えて来たすばらしい真理をより深く説明しようとしています。ごらんいただくと、アブラハムだけではなくて、そこにはもうひとり、彼らが尊敬するダビデ王のことも記されています。このような人々を引き合いに出して、これまでパウロが教え

てきたことが真理であるということをお人々に悟らせようとするのです。しかも、当然のことですが、この真理は新約聖書だけではなく、旧約聖書においても同じ真理です。真理であるなら、新約も旧約も同じであるはずで、そのことをパウロは教えるのです。4章を見ると、ユダヤ人から特に尊敬を博した人物アブラハムのことが記されています。覚えておられますか？ユダヤ人たちとイエスとの会話ですが、ヨハネ8：53でユダヤ人たちが「あなたは、私たちの父アブラハムよりも偉大なのですか。そのアブラハムは死んだのです。預言者たちもまた死にました。あなたは、自分自身をだれだと言うのですか。」とイエスに問いかけたところがあります。先ほどから話しているように、ユダヤ人たちが非常に尊敬していた人物です。それゆえに、恐らく、次のような教えが人々の間に広がって行ったのでしょうか。このアブラハムは聖い人であって、その行ないによって彼は救われたのだということです。実は「マナセの祈り」という本の中にそのようなことが記されています。「それゆえに、主、義なる神であるあなたは、あなたに対して罪を犯さなかったアブラハム、イサク、ヤコブという義なる者のために悔い改めを備えられたのではなく、罪人である私のために悔い改めを備えられたのである」と。もちろん、ここにはイサク、ヤコブという名前も引き合いに出されています。しかし、この中にアブラハムは罪を犯さなかったから悔い改めを必要としない人物であると言っているのです。

聖書はそのように教えているのでしょうか？教えていません。ユダヤ人たちは旧約聖書の中でそのようなことは学ばなかったはずで、ではなぜ、このような聖書が教えていないことが彼らの間に広まって行ったのでしょうか？大多数のラビたち—ユダヤ教の教師たちは、アブラハムの記事を彼ら自身の信条に適合するように変えて行ったというのです。してはならないことをするようになったのです。自分たちの教えたいことを教えるためにみことばを利用するのです。そして、みことばを変えて行くのです。このようなことがあったゆえに、先ほどから話しているように、アブラハムは罪がない聖い存在だったと、彼は行ないによって救われたというような教えが広がって行ったのです。パウロはそのようなことも知っていたのでしょうか。だから、ここではっきりさせようとするのです。あなたたちが尊敬するこのアブラハムはどのようにして救いに至ったのか、そのことをこの4章からパウロは教えるわけです。

☆アブラハムを通して教える救いの三つの真理

アブラハムを通して私たちは、救いに関して三つの真理を学んで行きます。これはもう既に私たちが学んで来たことです。しかし、そのことをもう一度パウロはここで教えようとするのです。

1. 信仰による救い 1－8節

今日はまず最初のところです。この1－8節を通してパウロは「信仰による救い」を教えようとしています。既に私たちが見て来たように、信仰のみによって救いは与えられる、そのことがここに記されています。

1) 救いは行ないによるのではない 1－2節

まず、私たちは1節を見て行きますが、この1－2節はその中でも特に「救いは行ないによるのではない」ということをパウロが教えようとしているところです。1節に「**それでは、肉による私たちの先祖アブラハムのばあいは、どうでしょうか。**」とあります。この1節を見るだけでも、私たちはパウロがこれまで語って来たことを、これからアブラハムという実例を用いて説明をしようとしていることは明らかです。今、私たちが見て行きたいのはこの1節ですが、実はこの原文には「何を獲得したと言えるのでしょうか」と、二つの動詞が記されているのです。残念ながら、日本語ではそのことが明らかになっていません。ですから、もし、それを加えてこの1節を読むなら、「それでは、肉による私たちの先祖アブラハムは何を獲得したと言えるのでしょうか。」と訳すことができます。しかし、今、私たちが見ている新改訳聖書には「**どうでしょうか。**」としか訳していません。

(a) 肉とは

この1節の中で言われている「**肉**」ということばがどういう意味なのか、そのことをしばらく見て行きましょう。というのは、このみことばは私たちに非常に大切なことを教えてくれます。今この「**肉による私たちの先祖アブラハムのばあいは、どうでしょうか。**」という新改訳の訳を見ました。もう少し忠実に訳すなら「何を獲得したと言えるのでしょうか」というように訳をしたわけですが、実は、この1節はこのような訳すことができます。それは「それでは私たちの先祖であるアブラハムは、肉によって何を獲得したと言えるのでしょうか」と。この「**肉**」が「私たちの先祖アブラハム」に係るのか、それとも「何を獲得した」に係るのかによって意味が異なります。そこで私たちはパウロがここで何を言いたかったのかを探るのですが、その前にまず、この「**肉**」とはどういう意味なのかを見て行きましょう。

このことばの意味は非常に大切です。この「**肉**」ということばは新約聖書の中に147回も出て来ます。非常にポピュラーなことばです。皆さんがこのことばを聞いて最初に連想されることは、「肉にある人は…」などということばを聞いて、これはどうも罪と関係していて、罪の中にいる人を指すときに使わ

れるのではないかということです。確かにそのとおりです。でも、そのように「罪と関連した」と訳す場合と、また「人のからだ」、「人」とか「人々」というようにも訳されるのです。そのような意味を持ったことばです。たとえば、エペソ人への手紙6：5に奴隷に対する教えが出て来ます。「**奴隷たちよ。あなたがたは、キリストに従うように、恐れおののいて真心から地上の主人に従いなさい。**」と書かれています。新改訳聖書には「**地上の**」というところにマークがついていて、下の欄外を見ると直訳として「肉による」と書かれています。同じことばが使われているのです。「**地上の**」というのと、先ほどの「**肉**」というのは同じことばを使っているのです。では、ここで何のことを言っているのでしょうか？パウロがこのエペソ6：5で言っていることは「あなたたちは地上の人間である主人たちに喜んで従って行きなさい」ということです。ですから、物ではなく「人」を指しているのです。この地上に生きているあなたたちの主人に対してこのような態度をとりなさいというのです。

また、ヘブル人への手紙の中にはそのことがもっと顕著に記されています。12：9に「**さらにまた、私たちに肉の父がいて、私たちに懲らしめたのですが、しかも私たちは彼らを敬ったのであれば、なおさらのこと、私たちはすべての霊の父に服従して生きるべきではないでしょうか。**」とあります。ここでは「**肉の父**」と「**霊の父**」とふたりの父のことが書かれています。「**霊の父**」というのは神のことです。「**肉の父**」というのは私たちのお父さん、「人」のことです。ですから、確かに、この「**肉**」ということばは「人」と訳せるのです。そうすると、もう一度ローマ書4章に戻っていただいて、新改訳聖書は「**肉による私たちの先祖アブラハムの**」を「**血のつながりがある人間であるアブラハム**」と解釈したのです。あなたたちユダヤ人たちと肉体的に血のつながりのあるあなたたちの先祖、私たちの先祖アブラハムというのです。パウロがもし、そのようにこのみことばを記したとするなら、彼の言いたかったことはこういうことです。ユダヤ人たちが非常に尊敬したこのアブラハムとあなたたちは特別な関係にある、では、その特別な関係にあるアブラハムはどのように救われたのか、それを見て行こうと、そのようにして彼らの関心を引き出します。そして、そこからアブラハムの救いについて教えようとする、そのように理解することもできるのですが、先ほど「それでは、私たちの先祖であるアブラハムは肉によって何を獲得したと言えるのでしょうか」と、二つ目の訳をご紹介します。どちらかというところの訳の方がパウロが言いたかったことに近いのではないかと私は思います。

なぜなら、この「**肉**」ということばの意味です。今、私たちが見て来たように、これはその罪と関連して用いる場合もあるし、そのからだであったり、人々という意味があります。同時に、このことばはピリピ人への手紙3：3-4では「**神の御霊によって礼拝をし、キリスト・イエスを誇り、人間的なものを頼みにしない私たちのほうこそ、割礼の者なのです。：4 ただし、私は、人間的なものにおいても頼むところがあります。もし、ほかの人が人間的なものに頼むところがあると思うなら、私は、それ以上です。**」と訳されています。3節の「**人間的なもの**」とあるところに、また同じようにマークがついていて、欄外には「直訳すると『肉を』」と書かれています。同じことばがここでは「**人間的**」と訳されているのです。先ほどから見ているローマ書4：1にある「**肉**」は、私たちが今見て来たように「人」と訳されていますが、このピリピ書では「**人間的**」と訳されています。このことばは何を意味するのでしょうか？簡単に言えばこれは、まだこの救いを受けていない人たち、救われていない人たちのことです。人の力、自分の力、自分の可能性によって、この救いを得ることができると信じている人たちのことです。

(b) パウロの告白

ですから、パウロはその後このピリピ3：5-6で、実は彼自身がそのような生き方をしていたと告白しています。パウロはただ単に行ないによる救いを求めている人たちを非難したのではないのです。パウロは「私も同じことをして来た」と言うのです。しかも、私はこのように行ないによる義を追求したと言うのです。ピリピ3：5-6「**私は八日目の割礼を受け、イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きつすいのヘブル人で、律法についてはパリサイ人、：6 その熱心は教会を迫害したほどで、律法による義についてならば非難されるところのない者です。**」なぜ、パウロはこのようなことを言ったのでしょうか？彼が4節で「**ほかの人が人間的なものに頼むところがあると思うなら、私は、それ以上です。**」言ったのは、あえて自分の過去、イエスを信じて救われる前のことを引き合いに出して、行ないによっては救いはない、救いは信仰のみだということを教えようとしているのです。パウロはここで、彼は行ないによる救いを求めたということを記しています。律法に従って彼は「**八日目に割礼**」を受けたのです。「**八日目**」と記したのはそれが律法の教えだったからです。私は律法が命じるとおりに割礼を受けています。しかも、「**その熱心は教会を迫害したほど**」と言います。そのように神が喜んでくださる行ないをすれば、神は私に救いをくださる。しかもこの中で「**律法についてはパリサイ人**」と言っています。「**パリサイ人**」は非常に保守的な考え方を持ったユダヤ教の人々です。だから、パウロが言いたいのは、私はこれまでユダヤ人として一生懸命この律法を守ろうと生きて来た、そこに救いがあると信じて行ないによって救いを得ることができると、そのように思っていたということです。そのことがここに記されています。

もう一つ、特権による救いを彼は信じていたことが記されています。「イスラエル民族に属し、ベニヤミンの分かれの者です。きつすいのヘブル人で」と彼は言っています。私はこの特別な「イスラエル民族」のひとりである、「ベニヤミン」という特別な民族に属するし、そして、「きつすいのヘブル人」として生まれ、その教え、その慣習にも従順に従って来た、このようなさまざまな特権を持って私は生まれて来た、だから、そこに救いがあると思っていたと言うのです。もう一つ注意していただきたいのは、その後6節の後半に「律法による義についてならば非難されるところのない者です。」とあります。パウロが言ったことは、私は一生懸命律法を守って来た、そして、その私の生き様を見て、だれひとり私を非難できる人はいないというのです。すごいことを言っています。私がしていることを見て「彼は律法に反している」と言うことのできる人はいないと。これほど彼は厳格にこの律法の教えを守り行なおうとして来たのです。なぜでしょう？そこに罪の赦し救いがあると信じていたからです。でも、それは大きな間違いであったとパウロは言うのです。そういう人間的なものによって、そして、自分の努力によって、力によって救いを得ようとする、それは非常に愚かなことだ、そのことをパウロは「肉による」と言い、今私たちが見て来た通り「人間的」と言ったのです。

ですから、もう一度ローマ書に戻って、パウロはここで「肉」と「獲得した」というのを結びつけていると思います。なぜなら、それを結びつけることによって、彼自身が信じていた行ないによる救いを吟味することができるからです。それが本当に正しかったのかどうか、それが本当に救いをもたらすものなのかどうかを、もう一度吟味することができるからです。ですから、この1節の二つ目の訳をもう一度読むとこの通りです。「それでは私たちの先祖であるアブラハムは、肉によって何を獲得したと言えるのでしょうか。自分の力で一生懸命努力することによって、いったい何を獲得したと言えるのでしょうか。」と、これがここでパウロが言いたかったことであるように思います。その理由が次の2節に記されているように見えます。「もしアブラハムが行ないによって義と認められたのなら、彼は誇ることができます。」、行ないによる救いのことを言っています。私もそうだったけれど、アブラハムも肉によって、自分の行ないによって、自分の努力によって、救いを獲得することはできない、もしそれができただったら、彼は自分を誇る事ができる。もう既に私たちが3章で見て来たように、自分で自分を救うことができるとするならば、私たちは自分を誇る事ができる、しかし、それができないのだと言っているのです。ロイド・ジョーンズはこのように言っています。「肉とは人が救いという件でより頼みがちないっさいのものを意味する。」と。このローマ4：1-2でパウロが言いたかったこと、それは彼が繰り返し教えていることです。どんな行ないをもってしても罪の赦しを得ることはできない、救いは行ないによるのではないということです。

2) 救いは信仰による 3節

(a) パウロの信仰

3節で彼は続けてこのように私たちに教えます。「救いというのは信仰による」と。見てください。「聖書は何と言っていますか。『それでアブラハムは神を信じた。それが彼の義と見なされた。』とあります。」と。これは旧約聖書の創世記15：6の引用です。そこを開く前にこの4：3のみことばで「アブラハムは神を信じた」の「信じた」ということばを見ましょう。これは「疑わないで信じる」、「信頼する」、「確信を抱く」という意味のことばが使われています。では、パウロが引用した創世記15：6を開いて見ましょう。そこには「彼は主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。」と書かれています。このことばが引用されているのです。アブラハムは「主を信じた」のです。この「信じた」ということばは非常におもしろいことばが使われています。「アーメン」というヘブライ語です。これは「信じる」という意味もあります。「信頼する」という意味もあります。しかし、「アーメン」という意味をもったことば、ある人はそこから、これは「アーメンということ」、それを表わしたことばだと言います。「アーメン」とは「本当に」、「確かに」、「まことに」、「そのとおり」、「しかり」といった意味をもったことばです。アブラハムはここで神に対して「アーメン」と言ったと記しているのです。アブラハムはウルの地を出て、そして、カランの地へと移り住みました。その当時、まだ彼はアブラハムではなくて「アブラム」と呼ばれていました。そして、このカランの地を彼が出たのは75歳でした。そのことは創世記12章に出て来ます。このカランという町は非常に偶像と異教にあふれた町でした。そこにいた時に、神はアブラハムに対してこのような約束を与えたのです。「：1 その後、主はアブラムに仰せられた。「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。：2 そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。あなたの名は祝福となる。」と。これは創世記12：1-2に記されている約束です。その約束をいただいたアブラハムは住み慣れたカランを出て行くのです。多くの友人たちと別れなければいけなかったかもしれません。そこで築いたさまざまな交友関係を断たなければいけなかったかもしれません。さまざまな生活上の安定やその快適さというものを捨てなければならなかったかもしれません。しかし、アブラハムは神が行けと言われる以

上私は出て行くのだと言って、その命令に従ってカナン¹の地へと向かってカラン²を後にします。

カナンの地に到着した後、彼は神の約束の成就を忍耐をもって待ち望んでいました。ところが、何も起こりません。そして、自分の年齢がもう子どもをもうける年齢を過ぎていることを知ったアブラハムは、神に対してこのような質問をします。「**神、主よ。私に何をとお与えになるのですか。私にはまだ子がありません。私の家の相続人は、あのダマスコのエリエゼルになるのでしょうか。**」と（創世記15：2）。神の約束を知ってはいました。ところが、何も起こらないのでアブラハムはこのようなことを神に問いかけるのです。そのときに神が何をなさったか、みことばはこのように続きます。15：5「**そして、彼を外に連れ出して仰せられた。「さあ、天を見上げなさい。星を数えることができるなら、それを数えなさい。」さらに仰せられた。「あなたの子孫はこのようになる。」**」と。そして、先の6節が続くのです。このような約束が与えられたのです。年齢を重ねてもう子どもが生めない年齢だというのは分かっていたましたが、神の約束がそこにあったのです。あなたの子孫はこの天の星のようになるのだと、そのメッセージを聞いたときにアブラハムが言ったことは「でも、神さま…」ではなく「アーメン」でした。「主よ、そのとおりです。あなたの言われることは真理です。私はあなたの言われることを信じます」と。そのことがこの6節に記されているのです。「**彼は主を信じた**」のです。

(b) 転嫁

その結果はどうでしょう？15：6の続きに「**主はそれを彼の義と認められた。**」とあります。「**認められた**」ということばは「帰する」、「思う」、「みなす」、「諮る」という意味をもったことばです。ローマ書4章に戻ってください。創世記15：6では「**認められた**」とありました。ローマ書4章でパウロがこのみことばを引用したとき彼はこう言っています。「**それでアブラハムは神を信じた。それが彼の義とみなされた**」と。結論から言うと、これらは同じ意味です。この「**みなされた**」と訳されていることばは、ローマ人への手紙だけを見ても19回も出て来ます。しかも驚くべきことに、この4章だけで11回も出て来るのです。「**みなす**」が8回、「**認める**」が3回出て来ます。ローマ書全体を見ると「**みなす**」や「**認める**」、「**思う**」、「**考える**」というように訳されていることばです。では、このことばはどのような意味をもっているのでしょうか？パウロが「**みなす**」と言ったことばは創世記では「**認める**」と記されていたことばです。これは「勘定に入れる」、また「考慮する」、「会計簿に入れる」という意味をもったことばです。ウェストミンスター神学校の組織神学の教授だったジョン・マレーは「『彼の勘定に入れられた』、それは『彼に転嫁された』という意味である」と説明しています。また、別の辞書を見ると、会計士とか会計係の用語であって、その意味は「会計簿に入れること」とあります。このことばがもっている意味は「だれかの勘定に入れること」です。神学辞典では、このヘブル語の「**認められる**」ということば、また、ギリシャ語の「**みなす**」ということばは、どちらも「転嫁」という教理を現わすことばとして用いられているとあります。

そこで「**転嫁**」とは何かということですが、先ほど説明したように、まさに「勘定に入れる」ということです。「**転嫁**」というのは「何かを人の勘定につける」とか「その人の不足を補う」とか「だれかの口座に入れる」という意味なのです。もう少し説明しましょう。新約聖書の中にパウロがピレモンに手紙を送った「**ピレモンへの手紙**」があります。パウロがなぜこのような手紙をピレモンに送ったのか？オネシモを受け入れるようにと勧めているのです。オネシモがいったい何をしたのはか記されていませんが、パウロのことばによると18節「**もし彼があなたに対して損害をかけたか、負債を負っているのでしたら、…**」とあります。奴隷が主人のところから逃げるのですからこのような可能性は大いにありました。実際に負債があったかどうかは明らかにしていません。また、もしあったとしてどれくらいの負債であったのか、そのことも記されていません。ただ、パウロは続いて「**その請求は私にしてください。**」と言っています。19節には「**この手紙は私の自筆です。私がそれを支払います。**」とあります。これが今私たちが見ている「**転嫁**」ということばの意味なのです。オネシモがもし負債を負っていたとしましょう。彼はそれを自分で支払うことができなかった、だから、パウロはそのオネシモの負債をパウロ自身の勘定につけておいてくれと言ったのです。そして、パウロはあたかもそれが自分の負債であるかのように彼に代わって支払いますと言っています。これが「**転嫁**」なのです。この「**転嫁**」という教理、これは信仰によって義とされるという「**信仰義認**」という教理と一体になっています。信じる者の勘定に「**神の義**」を入れてくださるのです。

(c) 義認 — 罪を犯さない人になるわけではない。

どういうことでしょうか？主なる神は、主を信じる者に義を与えてくださる、そして、その人は神の前に義と認められるということは、私たちはもう既に見て来ました。ローマ3：26にはこのように記されていました。「**それは、今の時にご自身の義を現わすためであり、こうして神ご自身が義であり、また、イエスを信じる者を義とお認めになるためなのです。**」、神ご自身が義であり、イエスを信じる者を義とお認めになると言います。ここで教えられているように、パウロが語っている「**義**」というのは人間の義では

ありません。神の義です。十字架の行為はいったい何を私たちに明らかにしたのか思い出してください。それは神がどのようなお方であるのかということをはっきりと明らかにしたのです。神は罪を放っておかれる方ではない、神は罪に対して目をつぶって何もしないのではない、神は罪をさばかれる正しい聖い方である、神がどれほど罪を憎んでおられるのかということが、あの十字架を見るときに明らかになるのです。義なる神が、その神を信じる者にその人の勘定に神の義をつけてくれる、だから、その人は義なる者として義なる神によってみなされ、受け入れられ、その方と交わることが赦されるのです。「義と認められる」とは一般的には「義認」と言われていますが、これを学んだときに、信じる者が聖なる神の前に義と認められるという裁判上の行為であると言ったことを覚えておられますか？この「義と認められる」ということは、罪を犯さない義なる人となったということではないのです。そこを私たちはしっかりと覚えておかなければいけません。義と認められた、神があなたを義なる者と宣言してくださったということは、あなたが罪を犯さない、完全に義なる者となったということではないのです。だから、私たちは救われていても、悲しいことに、地上において罪に罪を重ねるのです。

多くのクリスチャンはそのことを分かっていないゆえに、救われたら罪を犯さない完全に聖い義なる者になったと思うのです。その結果、非常なジレンマを経験します。罪を犯さない者になったと知っているのに、罪を犯している自分がそこに存在するわけです。ゆえに、私は救われていないのではないかとある人たちは悩みます。聖書が今私たちに教えてくれている「義と認められる」ということは、罪を犯さない、義なる者となったというのではなくて、神が私たちにに対して「義なる者」と宣言してくださったということです。それが、パウロがここで教えている「義認」ということであり、そして、その神の前に義と認められるためには、神の義を私たちはいただかなければいけない、つまり、この「転嫁」が必要だとパウロは教えているのです。

(d) 私たちが神の口座に入れたもの

私たちが考えなければいけないことは、もし、私たちのうちに義が存在しているなら、私たちの口座に義を入れていただく必要はありません。私たちの口座には何もなければ入れていただくことが必要だったのです。私たちは義なる神の前に立つことができるような正しきや聖さをもっていません。それは神から与えられなければならなかったのです。私たちがもっていないものをいただくのです。そこでカルピンはこれを「転嫁的義」、「転嫁された義」と呼んだのです。義をもっていない私たちが神から義をいただいたというのです。このことに関して、いくつかのみことばがそのことを教えるのですが、もう一箇所イザヤ書53章を開いてください。5-6節に「しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。:6 私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かつてな道に向かって行った。しかし、主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。」とあります。5節の後半に「彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。」とあります。イエス・キリストの十字架のことです。このイエス・キリストの十字架によって信じるすべての人の罪が赦されると、私たちが今まで学んで来たように、イエス・キリストを信じる者たちに神がご自身の義を与えてくださるのです。だから、私たちは義なる神の前に立つことが赦されたのです。

「転嫁」ということを話しました。私たちにないものを与えてくれる、私たちの口座に振り込む、私たちの口座に入れること、勘定に入れるという説明をしました。神が私たち信仰者のためにしてくれたこと、それは神ご自身の義を与えてくれたことです。イエスは完璧に律法に従われました。彼は行ないにおいて完璧でした。その完全な義を信じる私たちに与えてくれたのです。では、私たち罪人は神に対して彼の口座に何を入れたのでしょうか？それは「罪」です。私たちに罪しかなかったのです。ですから、このイザヤ書で「彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。」と言ったのです。イエス・キリストの十字架の意味はあなたや私の罪のためでした。そして、6節の後半に「主は、私たちのすべての咎を彼に負わせた。」とあります。イエスが亡くなったのは私たちの身代わりでした。気づかれませんか？イエス・キリストはあなたのすべての罪を負って、十字架であなたが受けるさばきを受けてくださったのです。神はあなたや私の身代わりに、イエス・キリストをあな十字架上でさばいたのです。すべてをお造りになり、私たちに造り、私たちが愛して下さっているこの神に、私たちがしたことは私たちのその醜い罪を、その積罪を神の口座に振り込むことでした。そして、それに代わって神が私たちの口座に入れてくれたのはのろいではなかった、滅びでもなかった、ご自身の義です。だから、この信仰によって罪赦された私たちは、この義なる神の前に立つことが赦されたのです。神はイエス・キリストを信じるあなたを義なる者と宣言してくださったのです。

この地上の歩みは罪との戦いが続きます。しかし、いつまでも続くものではありません。栄光のからだをいただいたときに、私たちはその戦いを終えます。そして、神は私たちが日々、ご自身に似た者に変え続けてくださるのです。皆さん、お気づきになるでしょうか？どんな大きな犠牲が払われたのか、どん

な不釣り合いなことを神が私たちのためにしてくださったのか、こんな私たちを神はこれほどまでにあわれんで、このようなすばらしい救いを私たちに与えてくださったのです。

私たちクリスチャンはしっかり覚えなければいけません。神は信仰によってこのすばらしい救いをくださったということを。信仰のみが私にこのようなすばらしい祝福を与えてくれたのです。そのことを知って今日を生きることです。そのことを感謝して生きることです。このような大きな犠牲のもとに私たちは救われたのですから。

聖歌398番に「いくるかいもなし」というのがあります。ブレックという婦人がこの歌を書きました。1899年（明治32年）、非常に敬虔な信仰者であった彼女は、夫と6人の子どもたちに献身的に仕えた人でした。体はそんなに強くありませんでした。彼女は家事の合間に休息をとることが必要だったのです。そのときに彼女がしたことは、自分の一番好きなロッキングチェアに座って、時には子どもを抱きながら、ペンと紙を持って詩を書いたのです。彼女は音楽的な才能はなかったと言います。でも詩を書く才能はあったのです。600以上の詩を書いたと言われています。その中で私たちの国でも紹介されている賛美歌が聖歌の398番「いくるかいもなし」と、もう一つ聖歌641番「わがつみのために」です。日本語の歌詞はこのように記されています。

生くるかいもなしとひとり さだめたりしものを

死をもとして 救いませる 深きイエスの愛よ。

生きる値打ちのない、そんな私のために、主はご自分のいのちを投げ出してくださいました。そして、その犠牲によって私を救ってくださいました。何という深いイエスの愛か、そのように彼女は歌います。残念ながら、そのオリジナルの意味を日本語の歌詞に当てはめることは非常に難しいです。彼女が書いたのはだいたいこのような詩でした。

1. 私の身代わりに進んで死なれたお方が一人おられる
生きる価値の全くない私のために。
そして、十字架への道をイエスは進んで歩まれた。
私の人生のすべての罪を赦すために。
3. 私は私の救い主について決して離れない。
私は日々心と唇に賛美を持って喜びながら旅を続けます。
それは私の罪が取り除かれたのだから。

彼女ははっきり分かっていたのです。このイエスによって私のすべての罪が赦されたことを。だから、彼女は日々そのことを思いつつ、その賛美を心に抱きながら、そして、賛美を主に捧げながら信仰の旅路を歩み続けて行きますと歌うのです。このように生きた信仰の先輩がいるのです。彼女はこの神のすばらしい犠牲を知っていました。そして、そのことを知ったときに彼女ができたことは、この神に感謝しながら、この救いを喜びながら生きることでした。

信仰者の皆さん、あなたはそのことを喜びながら歩んでおられますか？行ないではなく信仰によって罪が赦され救われたという、すばらしい神の祝福を喜んでおられますか？感謝していますか？そのことを賛美していますか？これらのことは、こんな大きな犠牲を払ってくださった神に対して、私たちがなすべきほんの小さなことだと思いませんか？神を喜びながら、神を賛美しながら、称えながら、今日を生きて行く！と、そのように生きることです。そのように生きて、このすばらしい神の恵みを伝えて行くことです。救いは信仰によってのみ与えられるのです。